B-1

クルフ語の自発使役構文[1]

小林正人（東京大学文学部）
masatok@L.u-tokyo.ac.jp

1. クルフ語の概要

クルフ語 (kuɽux) はインド東部ジャールカンド州、西ベンガル州、オディシャ州などで約 200 万人が話す、ドラヴィダ語族クルフ・マルト語派の言語である。他のドラヴィダ語族言語から地理的に隔絶しており、隣接する他語族言語から接触による影響を受けている。

クルフ語の音素は母音 a e i o u aː eː iː oː uː とその鼻音、子音 k k^h g g^h x c [ʧ] c^h j [ʤ] j^h ʈ $ʈ^h$ ɖ $ɖ^h$ ɽ $ɽ^h$ t t^h d d^h p p^h b b^h ɳ ɲ ŋ m s h y [j] w である。クルフ語の形態法はほぼ一貫して接尾辞による。名詞語幹には性数を表す接辞がつき、その後に対格、道具格・奪格、与格、属格、場所格の格語尾がつく。格語尾のない形は主格や対格として用いられる。動詞語幹は語根単独、または語根と接尾辞により形成され、その後に時制接辞と人称・数・性の一致を表す人称語尾がつく。語順は SOV、AN、GN という主要部末端型が優勢である。アラインメントは対格型である。

本発表は自作の書き起こしコーパス、クルフ語小説 (Tirkey 2017) 、2017 年に 30 代男性母語話者から聞き取り調査、メールでの追加質問を行った結果に基づいている。

2. クルフ語のヴォイス

クルフ語の動詞語根（それ以上分析できない動詞形態素）には、boŋg-「走る」、nuɲj-「痛い」のような自動詞と moːc-「切る」のような他動詞の両方がある。クルフ語では通常、動詞語根または語幹に接尾辞をつけてヴォイスを転換する。ヴォイスを表す接尾辞は、次の３つである。他動詞 sajʔ-「はめる、付ける」の派生語幹とあわせて次に例示する。

A **再帰接辞** -rʔ : 自動詞または他動詞につき、再帰、受身、逆使役を表す。例 : saj-**rʔ**- 「（自ら）はまり込む、はめられる、はまる」

B **受身接辞** -taːrʔ : C の**使役接辞** -tʔ に A の**再帰接辞** -rʔ がついた形であり、明示的な受身語幹を作る。例 : saj-**taːrʔ**- 「（誰かによって何かが）はめられる」

C **使役語幹** -tʔ/-ʔ : 自動詞または他動詞につき、使役を表す。例 : saj-**tʔ**- 「はめさせる」。生産的な接辞は -tʔ だが、一部の動詞は -ʔ によって使役形を作る : arg-「登る」vs. arg**ʔ**-「登らせる、載せる」

3. 各ヴォイスのもつ自発用法

先行研究 (Grignard 1924) では明示的に指摘されていなかったが、調査の結果、再帰、受身、使役いずれの接辞による動詞語幹も、次の各例のような**自発用法**をもつことが分かった。なお本稿では**自発**を**「不特定の経験者に非意図的な事象の惹起を表すこと」**と定義する。

---

[1] 本稿の作成に当たっては、Tetru Oraon、林徹、西村義樹、梅谷博之、青山和輝の各氏に貴重な教示を頂いた。本発表は科学研究費補助金（基盤 C, 26370475）による成果の一部である。グロスの略語は次の通り : 2 : 2 人称、3 : 3 人称、具 : 道具格、所 : 場所格、接 : 接続法、属 : 属格、対 : 対格、単 : 単数、男 : 男性形、未 : 未来

A **再帰接辞**では、mucc-「閉める」→muc-**rʔ**-「閉まる」

B **受身接辞**では、axʔ-「知る」→ax-**taːrʔ**-「知られる、知れる、分かる」（但し A の再帰接辞による ax-**rʔ**-もあり）

C **使役接辞**では、alkʰ-「笑う」→alkʰ-**tʔ**-「笑わせる→笑える、可笑しい」

しかし、自発の動詞語幹を派生したいときに、どの接辞を選択すれば適格となるかは予測しがたい。本発表では、これら３つの接辞の意味の違いを明らかにした上で、３つの自発用法がどのような動詞と結びついているかを考察し、使役の自発用法の起源を論じる。

3.1 再帰語幹の自発用法

３つのヴォイス接辞のうち、再帰接辞はすべての他動詞語根と一部の自動詞語根（dʰurʔ-「合う」→dʰurrʔ-「合わさる」）につき、再帰語幹を作る。再帰語幹は使用頻度がきわめて高い一方､その意味や語形は派生前の語基から必ずしも予測できない：例えば jʰapʔ-「覆う」の再帰語幹 jʰap-rʔ- は「（毛布などを自身に）かける」という再帰の意味しか持たないが、mucc-「閉める」から派生される muc-rʔ- は「閉まる、閉じ込められる」という自発と受身の両義を持つ (Kobayashi and Tirkey 2017:149)。これは、この接辞が再帰、受動、逆使役という用法を中心としつつも、ほかにも中動態 (Kemmer 1991, Kazenin 2001: 920) にしばしば関連づけられる受影、心的プロセスなど多種の用法をもつからである（例 okk-「座る」→okkrʔ-「座って休む」）。また xandrʔ-「眠る」、ercrʔ-「汗をかく」、kʰatrʔ-「倒れる」のように、接辞なしの語基をもたない（印欧語の media tantum のような）再帰語幹のみの動詞もある。再帰接辞は受身を表すことから、次の例のように**受動的可能**（寺村 1982:259ff.）とも**自発**とも取りうる事態を表すことがある。

(1) iː culhaː dau mal ud-**rʔ**-iː
この 竈 よい 否定 燃やす-**再帰**-3 単
「この竈はうまく**燃えない**」(Kobayashi and Tirkey 2017:237)

(2) aɽiː-nuː irt-oy holeː amxiː embaː kam-**rʔ**-iː
壺-所 煮る-2 単.未 なら カレー 旨い 作る-**再帰**-3 単
「壺で煮るとカレーがおいしく**作れる・できる**」

(3) iː maikropʰoːn-tiː tiŋgliː-hiː saɽaː hũː mend-**rʔ**-iː
この マイク-具 ハエ-属 音 も 聞く-**再帰**-3 単
「このマイクならハエの音でも**聞ける・聞こえる**」

3.2 受身語幹の自発用法

受身接辞 -taːrʔ は、使役接辞 -tʔ に再帰接辞 -rʔ がついたものと考えられ、再帰接辞 -rʔ ほど使用頻度は高くないものの、受身のみを表し再帰・中動の機能をもたないことから、**明示的受身**を作るのに用いられる。この接辞は他動詞だけに付き、元の他動詞の目的語を主語として元の主語を背景化する。受身語幹は次の例のように可能を表すことがある。動作主は

(6)のように道具格で表せる。

(4) iː　aʈaiciː-nuː　bagge:　kicriː　saj-**taːrʔ**-iː
この スーツケース-所　たくさん　衣服　入れる-**受動**-3 単
「このスーツケースにはたくさん衣服が**入れられる**（samʔ-iː「入る」の方が普通）」

(5) aũdaː　bagge:　put^{h}iː　undul-nuː　mal　bac-**taːrʔ**-iː
それほど　多くの　本　一日-所　否定　読む-**受動**-3 単
「そんなにたくさんの本は一日で**読め**ない」

(6) enneː　ott^{h}a-n　ceʈ-naː　mukkar-tiː　pol-**taːrʔ**-iː
このような　重い-対　担ぐ-動名詞　女たち-具　できない-**受動**-3 単
「女にはこのような重い（荷）を担ぐことは**できない**。」(Grignard 1924:93, 160)

可能の延長として、(7)のような「ひとりでに～できる」という自発の用法が見られる。

(7) j^{h}aːrk^{h}aɳɖ-ta　tiːxil　bagge:　on-**taːrʔ**-iː
ジャールカンド州-の　米　たくさん　食う-**受動**-3 単
「ジャールカンド州の米は（おいしいので）たくさん**食べられる**」

受身接辞と 3.1 の再帰接辞はどちらも可能～自発の連続体を表しうるが、両接辞には次の例文(2)（再掲）と(8)に見られるような違いがある。

(2) aʈiː-nuː irt-oy hole: amxiː embaː kam-**rʔ**-iː「壺で煮るとカレーはおいしく**作れる・できる**」

(8) aːs　kumhr-as　mal-das.　aːs-tiː　ekaːse　aʈiː　kam-**taːrʔ**-oː
彼　陶芸師-男　ない-3 単　彼-具　どう　壺　作る-**受身**-3 単.未
「彼は陶芸師ではない。彼にどうやって壺が**作れ**よう？」

この対の場合、(2)はひとりでにできるという自発を表すが、(8)は作ろうとしてもできない状況を表し、動作主の有無、あるいは円山 (2007:59) のいう制御性の有無によって意味が対立している。

また、再帰接辞の例である上掲(3) tiŋgliː-hiː saʈaː hũː men-**drʔ**-iː「ハエの音でも**聞ける**」に対して、(9)の受身形 men-**taːrʔ**-iː「聞かれる」は能力の意味を含意しない自発的事象を表す。

(9) aːr-gahi　j^{h}agʈaː-hiː　saʈaː　nitkiː　men-**taːrʔ**-iː　leː
彼ら-属　喧嘩-属　声　いつも　聞く-**受動**-3 単　ね
「あの人たちの喧嘩の声がいつも**聞こえる**ね」

3.3 使役語幹の自発用法

使役接辞がついた使役語幹は、受身の意味をもたない一方、無生物もしくは**非情物の主語が何らかの事態を自然に惹き起こす**ときに用いられる。

(10)　gohom-guɳɖaː　bggeː　kʰok-**tʔ**-iː
小麦-粉　とても　咳する-**使役**-3 単
「小麦粉はとても**咳が出る**（咳をさせる）」

(11)　aː　sinimaː　bggeː　alkʰ-**tʔ**-iː
あの　映画　とても　笑う-**使役**-3 単
「あの映画はとても**笑える**（笑わせる）」

(12)　puːxkaː　hole　moːx-on.pahẽ　iɽkad　ga　anbʰaniyãː cab-**tʔ**-iː
揚げたの　なら　食べる-1 単.接　煮たの　は　とても　噛む-**使役**-3 単
「揚げ（豆）なら食べるけど、煮たのはとても**硬い**（噛ませる）」(Tirkey 2017:199)

自発使役が作れる動詞は必ずしも多くはなく、主に「咳が出る」「居眠りする」のような**肉体的・心的プロセスを表す動詞**から、そのプロセスを惹起する無生物・非情物を主題とする文に見られる。同様の自発文を作る動詞は、「疲れる」「痛む」などの**非対格自動詞**と、「笑う」「思い悩む」など**経験者を主語とする他動詞**に多い。なお、これらの動詞はしばしば再帰接辞 -rʔ をもち（例：kʰisaːrʔ-「怒る」）、その後に使役接辞 -tʔ を付加することは不可能でなくとも複雑に過ぎるため、自発使役文を作る動詞が少ないものと考えられる。

自発使役文がテクストや自然談話に出る例では、ほとんどの場合**経験者または動作主の項が明示されない**。しかし「この話は**子供たちを**笑わせた（子供たちにウケた）」のような、経験者を明示した作例を話者に提示したところ、それも適格であると判断された。

4.　考察

4.1 通言語的考察

使役動詞が自発を表すことは、クルフ語に限ったものではない。例えば日本語でも「優しい心遣いが**泣かせる**」など、主に非情物を主語にした自発使役の表現が少数見られる。

トルコ語はクルフ語とよく似た膠着的形態法をもち、再帰接辞、受身接辞、使役接辞によって動詞語幹が派生される。他動詞について再帰形を作る-(İ)n、他動詞について受身形を作る -İl/-İn/-n、自動詞から他動詞、他動詞から使役形を作る -t/-İt/-Dİr（林 2013:154ff.）は、クルフ語の再帰接辞、受身接辞、使役接辞とほぼ等価に見える。しかしながら、トルコ語の使役形自体はひと一般を経験者とする自発用法はもたず、使役形に形容詞接辞をつけることで属性を表すという：例 kork「怖がる」→kork-ut「怖がらせる」→kork-ut-ucu「怖がらせる（もの）→怖い」。ただし、特定の目的語があれば（例「経済危機は私を怖がらせる」）適格であるとされる（林 2013:160）。

英語では被使役者を義務的に表示するため、本稿の定義だと自発か使役かの区別が難しいが、例えば一般の you を用いた Onions make you cry.「玉葱はひとを泣かせる→泣ける」のような自発文は、「非意図的事象」を表しうる動詞から広く作られる（久野・高見 2014:9f.）。このことは、英語において This bus takes you to the station. や TV said … のように非情物が

他動詞や非能格自動詞の主語になりうることとも関連しているように思われる。

それに対して、非情物主語がより制限されるヒンディー語（インド、印欧語）のような言語だと、「玉葱は泣かせる」のような自発使役文は容認度が低い。クルフ語も非情物主語は避ける傾向があるので (Kobayashi & Tirkey 2017:237)、ヒンディー語と同様自発使役文も容認度が低いと予測されるのに、なぜ可能なのだろうか。

クルフ語自発使役文における使役形が典型的に経験者なしで現れることは、自発使役形が動詞の形を取っているものの、形容詞述語文のように**主語の属性を叙述**しているためと理解される。同様に再帰動詞による自発文も、非情物を主題主語とし、動作主は通常表示されない。もとの動詞が動作主を主語にする他動詞の場合は再帰接辞によって動作主を降格させ非表示にして、経験者を主語にする他動詞や非対格自動詞の場合は使役接辞によって経験者を背景化して非表示にすることで、主語の属性を述べていると考えられる。使役語幹 -tʔ も再帰接辞 -rʔ も、ともに自発を表すが、動詞の種類によって次のように相補分布しているものと思われる。

4.2 クルフ語固有の要因

クルフ語の自発使役は属性叙述であると述べたが、ではなぜ使役形が属性叙述に用いられるのか。一つには、クルフ語において動詞から形容詞を派生する形態法が豊富でなく、「怖がらせる」→「怖い」のような形容詞派生をしにくいことが要因と考えられる[2]。それに加えて、クルフ語の使役形が、**典型的な強制使役より広い機能**をもつことが関係していると思われる。次の例は小説（Tirkey 2017）中の親子の会話である。

(13) —“ekʰon baː eŋg-aːge endraː ondrkaː ciccka: raʔday?”

「父ちゃん、ぼくに何を（市場で）買ってきてくれたの？」（グロス省略）

—“endran ondr-**tʔ**-aːday hoː. idaː, jʰulaː araː pen̪tʰ!”

何を 買ってくる-**使役**-2単.現在進行 かい それ シャツ と ズボン

「何を**買ってきてやった**と思う？そら、シャツとズボンだよ。」(Tirkey 2017:115)

ここでは使役「何をお前が私に**買ってこさせている**か？」が「何をお前は**買ってきてもらった**か？」という意味で用いられている。使役形の機能が使役にとどまらず、**受益もしくは間接受身**も表している。次の例は民話を語っている話者の発言である。

---

[2] 動名詞接辞 -naː や現在分詞接辞 -uː によって動詞から形容詞を作ることができるが、これらは述語としては用いられない。

(14)　asan　ɖaɳḍiː　paːɽ-**tʔ**-iː
そこで　歌　歌う-**使役**-3 単
（語り手：）「ここで歌を歌うことになっているの」

使役形「歌わせる」が「この民話」を暗黙の主語、自分自身を非表示の使役者として、「私に**歌わせる→歌うきまりになっている**」と**義務**を表している。上でクルフ語では非情物が他動詞の主語になることが制限されていると述べたが、使役にはこの制限は当てはまらず、**事象の誘発や受影、間接受身を含む機能**を担っているものと考えられる。つまり、クルフ語の使役の自発用法は、クルフ語の使役形が強制使役に限らない広い機能をもつことの反映である。

クルフ語と最も近い系統関係にあるマルト語でも、使役接辞 -tr は nuŋj-「痛がらせる」→ nuŋj-tr-「痛む」のように自発使役形を作る（Kobayashi 2012:42）。マルト語の使役接辞 -tr については、ドラヴィダ祖語の *tar-「与える」に由来するという説もあり（Puttaswamy 2008:140）、**許容使役**に起源をもつことから事象の誘発を表すようになった可能性がある。

5. 結論

クルフ語は、南アジアの言語ではおそらく珍しい、使役の自発用法をもつ。そのような使役形が主に経験者主語動詞から作られることと、被使役者を通常表示しないことから、自発使役は属性を叙述する形式の一つと考えられる。この用法の起源は、クルフ語の使役が強制使役にとどまらず、誘発や受影などより広い機能をもつことにあると考えられる。

参考文献

Grignard, André. 1924. *A Grammar of the Oraon Language and Study in Oraon Idiom*. Calcutta: Catholic Orphan Press.

林徹. 2013. トルコ語文法ハンドブック. 白水社.

Kazenin, Konstantin I. 2001. Verbal reflexives and the middle voice. Haspelmath, Martin et al. (eds.), *Language Typology and Language Universals*, vol 2, 916–927. Berlin: de Gruyter.

Kemmer, Suzanne. 1993. The Middle Voice. Amsterdam and Philadelphia: Benjamins.

Kobayashi, Masato. 2012. *Texts and Grammar of Malto.* Vizianagaram: Kotoba.

Kobayashi, Masato and Bablu Tirkey. 2017. *The Kurux Language: Grammar, Texts and Lexicon*. Leiden and Boston: Brill.

久野暲・高見健一. 2014. 『謎解きの英文法：使役』. くろしお出版

円山拓子. 2007. 自発と可能の対照研究–日本語ラレル, 北海道方言ラサル, 韓国語 cita.『日本語文法』7, 52-68.

Puttaswamy, Chaithra. 2008. Descriptive Analysis of Verbs in Malto. Ph.D. dissertation, SOAS.

寺村秀夫. 1982. 『日本語のシンタクスと意味 I』. くろしお出版.

Tirkey, Bablu. 2017. *Khatrkā Ropnas gahi Tuṅgul*（『貧しいロプナの夢』） Bendora: Manas.